

カウンタメジャーの種類が反応時間による隠匿情報検査に与える影響

○水師葉月

(広島修道大学大学院人文科学研究科)

反応時間を指標とした隠匿情報検査 (Reaction Time-based Concealed Information Test: RT-CIT) は、簡便性の観点から再注目されている。虚偽検出において、裁決項目を認識していることを積極的に隠そうとする能動的行動をカウンタメジャー (CM) という (山本, 2019)。CM には、身体的 CM と精神的 CM がある (Ben-Shakhar, 2011)。本研究では、CM の種類が RT-CIT に与える影響を検討する。

方法

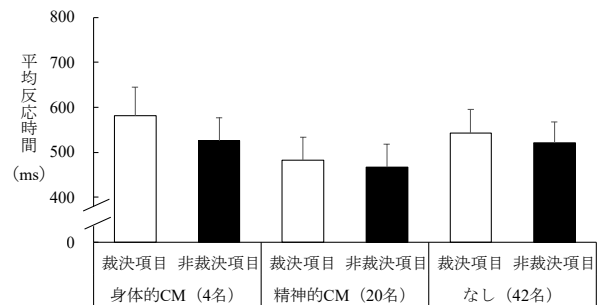
被検者 広島修道大学の学生 68 名であった。
窃盗シナリオ課題 被検者は、「資産家の家に侵入し、金目の物を盗み出して逃走する」という犯罪シナリオを読んだ。シナリオ中の『コードネーム』『侵入口』『宝飾品』『180 万の場所』『縛った物』については、各質問カテゴリの選択肢の中から被検者自身が選んでシナリオを完成させた。ここで選択した各項目が裁決項目となり、それ以外の 4 項目が非裁決項目となった。
手続き 被検者には「この検査によって窃盗を行ったと判定されないように努力・工夫をしてください。検査を無事にすり抜けることができれば謝礼を進呈します」と教示した。RT-CIT は、パソコンの画面上部に呈示する質問カテゴリのキーワードに対して、画面中央に呈示する裁決・非裁決・標的の各項目を、画面左右に呈示する「はい」「いいえ」に対応したキー (A キー, L キー) を押すことで分類する課題であった。裁決項目と非裁決項目に対しては「いいえ」で回答するよう求めた。被検者の注意を維持するための標的項目に対しては「はい」で回答するよう求めた。それぞれのカテゴリの裁決・非裁決・標的の各項目は全試行を通じて 6 回ずつランダムに呈示した。試行間間隔は 500～

1000ms であった。誤答および項目呈示後 800ms まで未回答の場合はその旨のフィードバックを画面上で行った。RT-CIT の実施後、検査をすり抜けるために被検者が行った努力・工夫の内容を聞き取った。

結果と考察

プログラムの不備があった 2 名を除外し、分析対象者は 66 名となった。誤答および反応時間が 150ms 未満と 800ms 以上の試行を分析から除外した。被検者から聞き取った犯行が露見しないための努力・工夫をもとに、KJ 法を用いて身体的 CM・精神的 CM・なしと分類した。CM の種類における裁決・非裁決項目に対する平均反応時間を Figure 1 に示す。

Figure 1
CM の種類における裁決・非裁決項目に対する平均反応時間



CM の種類 (身体的・精神的・なし) ×項目 (裁決・非裁決) を独立変数, 平均反応時間を従属変数として 2 要因分散分析を行った。その結果, CM の種類 ($F(2, 63) = 10.35, p < .001, \eta^2_p = .25$) と項目 ($F(1, 63) = 34.42, p < .001, \eta^2_p = .35$) の主効果, CM の種類と項目の交互作用 ($F(2, 63) = 3.40, p < .001, \eta^2_p = .10$) が有意であった。単純主効果の検定を行った結果, どの CM の種類においても裁決項目に対する反応時間が非裁決項目よりも長かった (身体 CM: $p < .001$, 精神 CM: $p = .02$, なし: $p < .001$)。したがって, CM の施行は RT-CIT には影響しないことが言え, RT-CIT の実現可能性を示した。